

J.S.バッハ：管弦楽組曲 第1番 BWV1066

全4曲からなる「管弦楽組曲」の作曲時期は定かではないが、この「第1番」は、ライプツィヒ時代に作成された写筆譜により伝わっている。演奏は小規模な室内合奏を想定しており、オーボエ2本、ファゴット、そして弦楽器と通奏低音で奏される。フランスの宮廷音楽に倣い、各楽章はフランス風舞曲にもとづいている。

序曲は、荘重な序奏部と活発なフーガ風の間部からなる。第2楽章は優雅なクーラント。第3楽章のガヴォットは快活な舞曲。第4楽章は速いリズムのフォルラーヌ。あまり聞き慣れない曲名だが、北イタリアの踊りに端を発する。第5楽章には、第3楽章のガヴォットと対をなすメヌエットが配されている。軽快で楽しげな第6楽章のブーレを経て、第7楽章にはブルターニュ地方を起源とするパスピエという舞曲が置かれ、華やいた雰囲気の中曲を閉じる。

J.S.バッハ（T.エーラー編）：

パルティータ 第1番 BWV825

パルティータ 第5番 BWV829

バッハは1726年から「パルティータ」を個別に出版していき、1731年に全6曲がまとめられた。

「第1番」は、三声の簡潔な書法によるプレリューディウム（プレリュード）で幕を開ける。それに続くのは、イタリア風の陽気なアルマンド。さらに、3連符のリズムで突っ走るイタリア式クーラント、旋律の豊かな装飾性が際立つサラバンドと来て、軽やかな二声のメヌエットⅠと、ミュゼット風の凝った四声のメヌエットⅡが交錯する。終楽章のジグはイタリア式で、D.スカルラッティの特技だった腕の交差テクニックが初めて採用された。

「第5番」は明るく華やかな性格を持ち、多彩な舞曲形式、緻密な対位法、高度な鍵盤技巧が融合している。プレリューディウム（プレリュード）は自由な形式の前奏曲。アルマンドは穏やかなドイツ舞曲。コレンテは軽快なイタリア舞曲。サラバンドはゆったりとした荘重なスペイン舞曲。テンポ・ディ・ミヌエッタ（メヌエットのテンポで）は、4分の3拍子を基本としている。パスピエは速めのフランス舞曲。終楽章のイギリス舞曲のジグでは、三声のフーガが華麗に展開する。

J.S.バッハ（M.レーガー編）：コラール前奏曲「おお人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」BWV622

原曲は、バッハがワイマール時代に作曲した「オルガン小曲集（Orgelbüchlein）」所収のオルガン独奏曲。編曲者のマックス・レーガーは、作曲家兼オルガニストとして活躍した人物で、バッハの作品を多数編曲している。キリストの受難と贖罪の全容を描いた音楽で、厳粛さのなかにどこか温かみのある旋律が心を打つ（ちなみに、同旋律は《マタイ受難曲》の終盤でも使用されている）。